

2026.01.18.

「わたしは命のパンである」

旧約 イザヤ書 54章 13～15節

新約 ヨハネによる福音書 6章 41～51節

1. はじめに

今朝の説教の題は「わたしは命のパンである」です。共にヨハネによる福音書を読み進めていますが、ヨハネによる福音書には「わたしは〇〇である」というイエス様の言葉は7つあります。これはヨハネによる福音書特有の言い方です。今朝与えられている「わたしは命のパンである」は6:48と6:35に記されておりますが、ヨハネによる福音書で最初に出てくる「わたしは〇〇である」の言葉です。ヨハネによる福音書の6章は「五千人の給食」の出来事から始まりまして、22節以降、「パン」という言葉を巡って、イエス様ご自身が自分は誰であるのか、何のために来たのか、何と与えられる方なのかということ、人々と対話をしながら告げているところです。

ところで、ヨハネによる福音書には「わたしは〇〇である」というイエス様の言葉が7つあるのですが、他の6つの言葉はどんな言葉だったでしょう。「わたしは世の光である」(7:12)「わたしは(羊の)門である」(10:7, 9)「わたしは良い羊飼いです」(10:11)「わたしは復活であり、命である」(11:25)「わたしは道であり、真理であり、命である」(14:6)そして「わたしはまことのぶどうの木」(15:1)です。この「わたしは〇〇である」という言葉は、イエス様ご自身が自分は何者であり、どのような者なのかということをお告げになった言葉です。これからヨハネによる福音書を読み進めていく中で、その一つ一つについて思いを巡らしていきますけれど、どの言葉もイエス様が神の御子であり、救いをもたらす方であり、永遠の命を与える方であることを示しています。

2. 天から降ってきたパン

さてイエス様が「5千人の給食」を為されたとき、この出来事を旧約におけるマナの出来事、イスラエルの民がモーセに率いられてエジプトを脱出しカナンを目指した、その40年に及ぶ荒野の旅の間、イスラエルを養い続けた神様の不思議な養い、天から降ってきたあのマナの出来事と重ねて受け取った人々がいました。しかし、イエス様は、48－50節でこう告げておられます。

「6:48 わたしは命のパンである。 6:49 あなたたちの先祖は荒野でマナを食べたが、死んでしまった。 6:50 しかし、これ(命のパンであるイエス様)は、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。」確かに、神様は天からマナを降らせて、40年にわたってイスラエルの民を養って下さいました。しかし、マナがどんなに不思議な天から降ってきたパンであったとして

も、それを食べたイスラエルの民はどうなったか？結局死んでしまったではないか。マナは、この肉体の命を支える食物でしかなかった。しかし、「イエス様が『わたしは天から降って来たパンである』と言われた」(41 節)のは、イエス様はこの肉体の命を支え養うことを超えて、39. 40 節にあるように「わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させる」(39 節)ためであり、「6:40 わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得る」ためであり、「その人を終わりの日に復活させる」ためでした(40 節)。イエス様は、そのためのパンであるということをご告げられたわけです。しかし、人々にこのことは伝わりませんでした。復活とか永遠の命というものは、イエス様によって私共に与えられる完成された救いの姿、救いの有り様です。しかし、人は目に見える命が命の全てであると思っていたからです。それは、今も昔も変わりません。人は死んだらおしまいだと思っています。学校で教える「命」とは、肉体の命だけです。細胞だ、遺伝子だ、DNAだと言ったところで、全て目に見える命のことです。そして、その科学的な認識だけがただ一つの認識だと思っています。そもそも科学というものは、誰でも観察でき、同じ条件で同じことをすれば同じことが起きる、そのような現象しか対象にすることはしませんし、対象とすることは出来ません。ですから、そもそも神様とかイエス様というのは、科学の対象外なのです。聖書に記されている奇跡も同じです。ですから、イエス様が「天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。」(41 節)と言われても、この地上の命が全てだと思っている人々には、何を言われているのか分からなかった、ということなのでしょう。

3. 旧約とイエス様

ここで、旧約とイエス様との関係を少し確認しておきましょう。マナの出来事は確かにイエス様の 5 千人の給食の出来事を指し示していると読むことが出来ます。しかし、それは指し示しているだけであって、同じではありません。イエス様による完全な救いを、イエス様によって示された神様の愛と御力とを指し示してはいるけれども、同じではありません。旧約の出来事は、イエス様の十字架・復活・昇天によって与えられた完全な救い、永遠の命、復活の命を与えるものではありません。イエス様と出会った人々は、これが分からなかった。旧約の出来事も言葉も知っているけれど、それが指し示していたのはイエス様による完全な救いであることが分からなかった。受け入れることが出来なかった。それは本当に残念なことでした。いつも思うのですが、私があの時代に生きていてイエス様と出会っていたならば、きっとイエス様を受け入れなかった人々と同じ反応をしたんだろうと思います。しかし、今はイエス様を「我が主、我が神」として信じ、愛し、従っている。まことにありがたいことだと思います。

4. 天から？ヨセフの子ではないか

さて、「わたしは天から降って来たパンである」との御言葉ですが、ここで注目すべきヨハネに

よる福音書特有の表現があります。それは「天から」という表現です。これはイエス様が天におられる父なる神様の御もとから来られた方だということを示しているわけです。もっとはっきり言えば、イエス様が天的な存在である、神様であるということを示しています。どこから来られたかということを示すことによって、イエス様が誰であるかということを知っているわけです。このイエス様の言葉に対して、人々は「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、『わたしは天から降って来た』などと言うのか。」(42 節) とつぶやいたわけです。人々はイエス様の父・母、そして家族を知っています。イエス様に対して「あれはナザレの村のヨセフの子ではないか。母親はマリアじゃないか。儂は知っとるぞ。ヨセフは大工じゃないか。それなのに、何を『天から降ってきた』なんて言うのか。ナザレから来たんじゃないか。」そう思ったし、つぶやいたわけです。イエス様がナザレから来たのは事実です。ですから、彼らが思うのももっともです。彼らは肉をもったイエス様を知っていました。そして、それが全てだと思っていました。この感覚は、私共も良く分かるでしょう。ある人の名前が出た時に、「あ〜っ、その人知ってる。あの人は〇〇に住んでいて、仕事は△△じゃないかな。」というわけです。しかし、その「知っている」という思いが、イエス様が「わたしは天から降って来た」と言われたときに、イエス様が告げようとしたことを受け止めることが出来なかった原因でした。イエス様はルカ 4:24 で「はっきり言っておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。」と告げられましたが、それはこのようなことを言われたのでしょうか。このことは、私共にとっても大切なことを教えています。それは、「自分が知っていると思っていることが全てではない。人には目には見えない重大なことがある。そのことをきちんと認め、忘れないようにしなければならない。」ということです。この時、人々は、目に見えるところのイエス様を知っていました、幼いときからのイエス様を知っていたかもしれません。それ故に、イエス様が天から来られたこと、つまり神の御子であること、メシア（キリスト）であることを受け入れることが出来ませんでした。これはとても残念で、もったいないことでした。イエス様を信じ、救われる道を自ら閉じてしまったからです。

私共もそのような判断をしがちであることを心に刻んでおかなければなりません。私共は目に見えることしか見えないし、見ようとしないう者であるということを知り、弁えるということです。勿論、イエス様が「天から降ってこられた」ということを否定する、イエス様が神の御子であることを受け入れない。私共はそんなことはしません。しかし、「神の子」とされている同じキリスト者に対して、その人の人間としての弱さ、今までの生活、その断片的な知識からその人を判断し、その人が「神の子とされている」「神様に愛されている」「神様に造られた」というその人の本当の価値、それは神様の眼差しの中における絶対的な価値と言っても良い、その点を決して見失っていないかということです。キリストの教会に満ちる穏やかな愛というものは、神様の子として互いに尊重し、重んじる、見えるところだけを見るという愚かさから解き放たれるということを基礎に育まれていくものです。この世における価値観でしか互いに見ることが出来なければ、そこに生まれる

交わりはこの世の交わりを超えることはありません。それでは教会が御国を指し示すことはできません。

5. 父なる神様の計画、意思、導きによって

今、この時ユダヤ人達がイエス様を信じることが出来なかったのは、イエス様の見えるところだけを見てしまい、それが全てであるかのように思ってしまったからだと申しました。しかし、もっと根本的な理由、原因があります。イエス様は 44 節「**6:44 わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。**」と告げました。つまり、父なる神様がその人を選び、この人を救おうとお決めになり、イエス様のもとに導き、イエス様の言葉を信じるように、イエス様を神様の御子と受け入れることが出来るようにお働きくださった。それ故に、私共はイエス様の救いに与りました。私共がイエス様を「我が主、我が神」として信じ受け入れたのは、この時のユダヤ人達よりも自分は見えないところを見る、まことの信仰の眼差しがあったからだ、彼らよりも自分が謙遜だったからだ、というようなことでは全くありません。見えないところに目を注ぐということが出来るとすれば、それはただ神様の憐れみによる、神様のご計画、御意思、導きによるということです。45 節に「**6:45 預言者の書に、『彼らは皆、神によって教えられる』と書いてある。父から聞いて学んだ者は皆、わたしのもとに来る。**」とイエス様が告げられたとおりです。「イエス様のもとに来る」ということは、イエス様の御もとに来て、悔い改め、イエス様を神の御子・救い主として信じ、受け入れるということです。そして、このような出来事は、「神様によって教えられ」「父なる神様に聞いて学ぶ」ということによってしか起きないということです。つまり、私共が研鑽し、自らの知恵や知識を増し加えていけば、ついにはそこに到達するというようなことではないということです。ただ、神様によってです。私共の信仰は、その最初から最後まで「神様によって」です。途中までは、或いは最初は「神様によって」だけれども、その後は私共の努力が必要だ、ということではありません。また、逆に途中までは、或いは最初は自分の努力が必要だけれども、その後は「神様によって」ということでもありません。最初から最後まで「神様によって」です。そのことは、初めは中々分からないかもしれません。それは「自分の努力によって」「自分の意志によって」、自分は生きてきたし、生きている。それが神なき世界の常識だからです。しかし、神様の愛、御力を知る中で、「ただ神様によって」ということがはっきり分かるようになっていきます。それが「信仰による認識」というものです。そして、ただ神様によってということが、福音なのです。

6. 父なる神を見たか？

更にイエス様は 46 節「**6:46 父を見た者は一人もいない。神のもとから来た者だけが父を見たのである**」と告げられました。この言葉と同じ言葉がヨハネによる福音書 1:16 にも記されて

います。天地を造られ、全てを御支配されている神様は、人間の目に見えるようなお方ではありません。それは、物理的に見えないということだけではなくて、人間の認識能力を遙かに超えたお方であるということでもあります。神様は、その御心を聖書という書物によって、また出来事によって私共に教えてくださいます。しかし、それとても、神様の全体像を知ることが出来るわけではありません。私共は、神様が聖書の言葉を通して語りかけてくださる御言葉によって、断片的に神様を知ることができるだけです。しかし、イエス様は「父を見た」のです。見たというのは、肉眼で見たという以上の意味があります。はっきりと分かった、理解したということです。イエス様は神の独り子であり、神様そのものだったからです。ですから、私共はイエス様を見ることによって、イエス様の言葉を聞くことによって、神様を知る者とされました。

7. 永遠の命を得ている

イエス様は「**6:47 はっきり言っておく。信じる者は永遠の命を得ている。**」と告げられました。この「信じる者」とは、イエス様を信じる者です。イエス様を信じる者は、永遠の命を得ている。永遠の命を「得るであろう」「得るかもしれない」ではなく「得ている」とイエス様は断言されました。勿論、永遠の命が復活の体と共に与えられるのは御国においてです。しかし、その時が来る前に、私共は既にそれを得ている。それは、不当たりになることのない、約束手形を既に手にしているのと同じです。約束手形は現金ではありません。しかし、それを手にしているということは、既に現金を手にしているのと同じでしょう。ただし、条件があります。それは、その手形を出した元の会社なりが、決して潰れないということが条件です。その点、神様・イエス様は、決して嘘をつかれませんか、永遠に生きたもうお方ですから、この方の約束手形は決して不当たりになることはありません。ですから、イエス様は「既に得た」と言い切られたのですし、私共は「既に得た」と確信して良いのです。私共は永遠の命を既に得ている。これがイエス様によって私共に与えられている救いの現実です。何度でも申し上げます。私共は既に永遠の命を得ています。これが私共にイエス様が与えてくださった約束です。この約束の中に既に生きているのが私共です。ありがたいことです。

8. イエス様が与えるパンは、イエス様ご自身である

最後にイエス様は「**6:48 わたしは命のパンである。 6:49 あなたたちの先祖は荒れ野でマンナを食べたが、死んでしまった。 6:50 しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。 6:51 わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。**」と告げられました。イエス様ご自身が命のパンであり、この命のパンを食べる者は永遠に生きる。と約束してくださいました。「イエス様を食べる」とは中々強烈な表現です。これはイエス様を愛し、信頼し、イエス様に従い、イエス様と共に生きることでしょう。イ

イエス様と一つにされた者として、生きるということです。人はパンが無ければ生きられないわけですから、イエス様がパンであるということは、別の何かを代わりに食べて生きていくことは出来ないということです。イエス様を愛し、信頼して生きるということは、他に色んな生き方があって、そちらを選ぶもイエス様を選ぶも自由だけれども、イエス様を選びましょうというようなことではないということです。イエス様を愛し、信頼して生きるということは、相撲が好きだ、サッカーが好きだ、料理が好きだというようなことと比べることが出来ない、これを抜きにして生きることは出来ない。そういう、なくてはならない、私共が生きる上でどうしても必要なことであり、このイエス様との関わり無しに、神様・イエス様との愛の交わり無しに、永遠の命など考えることも出来ないということです。イエス様抜きに、イエス様と無関係に、つまりイエス様を愛することなく人は永遠の命に生きることは出来ないということです。これは、このように言い換えても良いでしょう。私共が神様に造られた本来の自分を取り戻して、真っ当な人間として生きるためには、イエス様との愛の交わりが不可欠であり、イエス様によって示された神の子としての歩みに倣っていくことなしに、肉体の死と共に滅んでしまう命から抜け出すことは出来ないということです。それは、私共は自らの罪の重さの故に沈んでいく自分を支え、浮上させることが出来ないからです。しかし、イエス様は私共のために、私共に代わって、自らの肉体を十字架に架けられました。そのことによって、罪の泥沼に沈んでいくしかない私共に驚くほど強力な浮き輪、浮き輪どころか私共の体に幾重にも結んでくれたロープのようになって、私共を罪の泥沼から引き上げ、新しい神様の光の中を歩む道へと私共を立ててくださいました。それが、イエス様の肉、十字架に架けられた肉が、私共を永遠の命へと導いてくれる命の糧、命のパンとなってくださったということです。そのイエス様の十字架の肉は、復活の肉でもあります。私共は聖餐の度ごとにこのイエス様の肉を食し、イエス様の命と一つにさせていただいているわけです。ありがたいことです。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、聖書の言葉を通して、イエス様がまことの神にしてまことの人であられること、救い主キリストであられることを改めて心に刻むことを得させてくださいました。また、イエス様が無くてはならぬ私共の命のパンであることを知らされました。そのイエス様を愛し、信頼し、お従いして生きる者としていただいておりますこと、既に永遠の命を与えられておりますこと、心から感謝いたします。どうか、私共がこの恵みの中に生き切ることが出来ますよう、私共に聖霊を注ぎ、あなた様への愛と信仰とをいよいよ豊かに与えてください。私共が互いに愛し、信頼し、互いに仕え合う交わりを形作り、ここに神様がおられることを明らかに示す群れとして成長していくことが出来ますように。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン